



大泉小だより

令和7年1月31日
練馬区立大泉小学校

「子供たちの「成長」について考える」

校長 小高敏男

令和6年度も残すところ2か月となりました。登校日数は卒業式まで33日間です。子供たちには、一年間を振り返り確かな成長を実感させたい時期です。「2月は逃げる」そして「3月は去る」と言い、あっという間に過ぎるからこそ、一日一日の教育活動を大切に進めてまいります。ご理解ご協力のほど、よろしく願いたします。

今回は、成長について考えてみたいと思います。

成功を収めた実業家の話の中で「人は、順調なときには成長しない。失敗したり逆境に立ち向かったりしたときに成長する。」という内容をよく耳にします。子供にとっても「失敗」した経験から多くを学ぶことは言うまでもありません。学習面でも心の面でも同様です。

しかし、誰も失敗を恐れ、失敗しないようにと行動します。その行動が失敗しないように努力を重ね挑戦し続ける前向きな行動であれば良いのですが、そのものから逃げてしまう消極的な行動となってしまうのは、成長には結び付きません。子供は大人よりも経験も知識も少ないのですから、判断などを誤り、失敗しても当然です。

様々な失敗がありますが、失敗の中でも「人との関わりの失敗経験」が少なくなっているように感じます。一昔前は、子供は集団遊びの中で様々なトラブルを起こしては、子供同士で、時には年長者が仲介に入って、解決してきました。その解決も、トラブルの原因を取り除くだけでなく、トラブルに関わった子供の気持ちもスッキリとした状態にする解決でした。近年、子供のトラブルに大人が介入することが多くなってきていると言われています。大人が仲介することで、大人の価値観や判断を子供にお仕着せてしまい、その場は解決したようでも子供の気持ちはスッキリしないという場合があります。子供がトラブルという失敗をしても、解決する力を身に付けるという成長をしないままとなるわけです。

子供のトラブルには「お互い様」という様相がよくあります。子供たち自身にどうすればよいのかを考えさせ、その結果、どのようにしたかを大人はしっかりと見守ることが大切です。「見守る」とは、ただ見ているだけではなく、必要に応じて助言や支援をしていくことです。時間がかかっても、子供自身の判断で解決できたことが「成長」だと考えます。

また、「成長」の仕方は階段状であると言われていています。経験や学習をした分だけ「成長」するのかと思いがちですが、正比例ではありません。「成長」が現れる時期と、経験や学習などによっては「成長」が表面上では見られずに停滞する時期があります。努力し続けても成果が現れない時期を「高原現象」「高原状態」(プラトー)と言います。この状態のときに「我慢」できるかどうか、成長に関係してきます。このプラトーの時期を脱するまで、ひたすら努力し続けるには、「自分を信じる」または、「我が子を信じる」という我慢をするしかありません。また、取り組んでいることが好きであったり強い思いがあったりすることで、不断の努力を続けることの原動力になります。

我慢する力を身に付けさせるためには、段階的に我慢を覚えさせなければなりません。「我慢はかわいそう」と全く我慢をさせない状態は、一見、人権や自由意志を尊重しているようでも、我慢の仕方が分からない子供にしてしまったり、「我慢は大切」とおやみに我慢を強いることも心理的負担が大きすぎて危険を伴ったりしてしまいます。子供の能力や発達段階に応じた、「適度な我慢」体験をさせることが重要です。単に、心を鬼にするのではなく、冷静に子供を見つめ、必要かつ適度な我慢を与えることが大切だということです。

子供たちは様々な失敗を繰り返し、不安や焦りに耐え、次のステージへと着実に一段一段を乗り越えていくことの連続で階段状に成長していきます。だからこそ、子供を見守る私たちにも、我慢強さが必要です。